風景構成要素の関係性に着目した都市構造物の提案
―ピクチャレスクの現代的解釈を通じて―

1．目的と背景

現代の日本の都市は雑して混沌と混わるが、そうした中にもある種の秩序が認められるとし、津田雄郎（1919-2003）はそれらを「隠れた秩序」と命名した。今後この混成とした都市の中で風景を構築していくためには、その新たな「隠れた秩序」の顕在化が1つの手がかりとなると考える。また西欧には古来から、現在の都市風景を形成する過程で、多種な要素が感覚的選択した風景を物語し、ピクチャレスク（pictuesque）な風景として認識する流れがあった。そこで本研究ではピクチャレスクな風景が与う特性は「隠れた秩序」を見出し、現代の文脈に沿った解釈を通じて、今後の新たな都市風景の構築方法を提示する。

2．ピクチャレスクの特性

18世紀当時から「ピクチャレスク」という言は多義的であったが、複数の文献における言説を通し考察すると、ピクチャレスクな風景の特性（隠れた秩序）としては以下の2点の存在が推察できる。

A：全体性をもたらす風景構成要素間の関係

B：美（beauty）と崇高（sublime）の感情

3・4．ピクチャレスクの現代的解釈

2つの特性について、複数の文献における言説を対象とし、過去および現代の文脈に沿った分析を行いその相違を明示する。ただし本研究においては、都市風景の「隠れた秩序」を顕現にすることという目的に即し、現代の文脈に沿った解釈を検討の中心に据える。

5．分析結果

現代～過去共通してある（起因素）をきっかけにピクチャレスクな風景特性AおよびBが誘起され、その段階を経たものは建築の外部要素のみならず内部要素にまで及ぶ。また、かつてピクチャレスク目指した風の（観察者）が対象であったのに対し、現代のピクチャレスクは見る対象の（動常者）を対象とする事例が見受けられ、風景の全体性は動常者の風景経験の中で構想されることで構築される。

風景構成要素
- 【環境要素】：建築の形成に影響を与えている周辺環境要素
- 【表現要素】：環境要素との関係が考慮されている建築構成要素

【起因素】：特性AおよびBを誘起するきっかけとなる要素

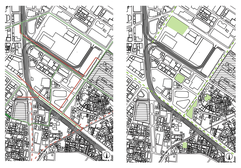
6．プロジェクト

今後この混成とした都市の中で風景を構築していくための新たな方法を提示する。本プロジェクトでは上記研究から見出した、現代の文脈に沿ったピクチャレスク特性AおよびB（隠れた秩序）を誘起する【起因素】として、連続高架橋を取りあげる。連続高架橋は混成と言われる日本の都市景観を形成してきた大きな要素のひとつである。

―1．計画敷地

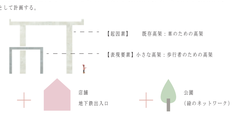
計画敷地とする東池袋地区は北西に池袋、北東に大塚、南側に雑司ヶ谷と接することで、副都心の商業地区と昭和時代の古い住宅が共存している。現在この地域では、道路拡張や道型用路転換地区用等によって混成した複雑な地域性を観察させることを目的とする。再開発が行われていない、しかし同時に、そうした大規模な変容によって複雑に混成した地域特性を帯びってしまうことも危惧される。そこで、この地域の中心を貫く連続高架橋を（起因素）とした、東池袋地区の風景の再構成を図る。

道型路線転（新が食道成に伴う
【公園ネットワークを活かした緑化計画、歩行者回遊ネットワーク形成の計画】

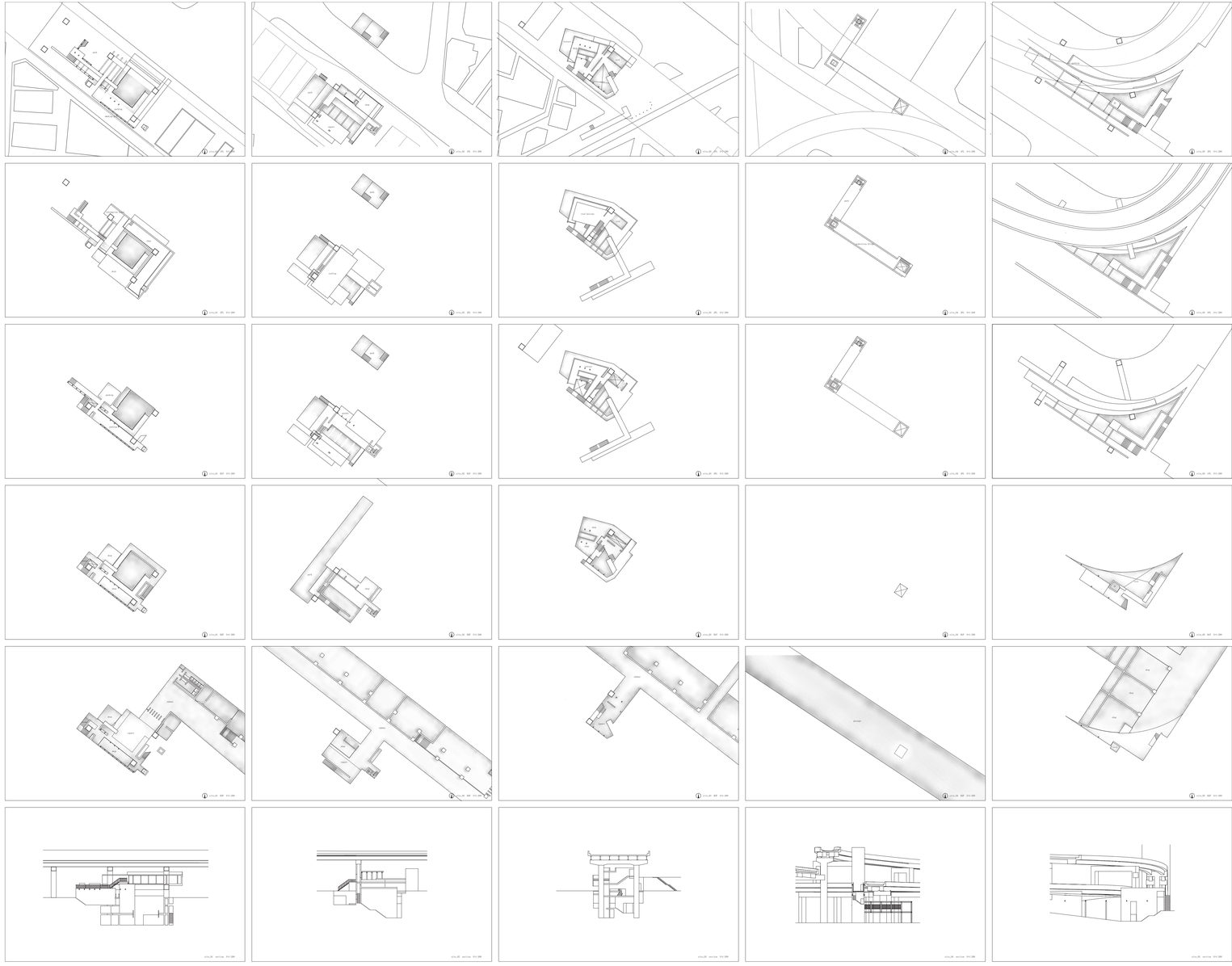


―2．プログラム

既存高架を【起因素】として、新規に計画する高架を【表現要素】、高架周辺要素を【環境要素】として計画する。



―3．要素の抽出

東池袋地区高架周辺の分析から、右表に示す19個の【環境要素】および15個の【表現要素（既存高架下建築物）】、またそれら風景構成要素が発現させている環境性（特性A）および感情性（特性B）が抽出された。抽出した2つの特性について再構築を行っていく。

さらに抽出された風景構成要素を元にした2つの計画敷地を選定する。